

本居宣長と桜伝説

鈴木 淳

要 旨 宣長が詠んだ桜の歌のうちに〈花帰根〉という趣意を詠んだものがあるが、これは『和漢朗詠集』の漢詩句の翻案以来、詠み継がれてきた趣向で、和歌に限らず謡曲や連俳狂歌にまで及ぶものである。そのうち、花が散って帰ってゆく根と、人が死んでのち往く場所とを重ね合わせた和歌や謡曲の詞章があるのに注意したい。また花の下で死ぬことを希求した西行の墓は、近世、似雲等の執念によって発見され、西行同様、花とともに死んだように伝説化された兼好の墓の穿鑿も、人々の大きな関心事であった。さらに、『続近世畸人伝』の編者三熊花頼も、桜三昧に徹した一人で、宣長に影響を与えたことが推測される。宣長は、これらの桜にまつわる伝説に共感しつつ、また自らの好尚を素直に表現する形で、その死生を演出したのであり、松桜各一株が植えられた塚と石塔からなる宣長の墓のうち、とくに山桜にそれが凝縮されている。

はじめに

本居宣長が、自らの埋葬に深い執心を示し、生前から地所の買収や石塔の注文など着々と準備を致し、『遺言書』を認めて没後の心掟にまで周到な配慮をみせていたことは、つとに有名である。その核心は、念仏無用の葬儀や、夜中、蜜かに行おうとした野辺送りもさることながら、山室山に現存する墳墓にあると言うべきであろう。「本居宣長之奥墓」の七文字を刻んだだけの舟形の御影石と墳上の桜と松各一株からなるそれは、儒者流の碑文もなければ、仏家流の戒名もなく、至って簡素な墓相であるが、それを神式と片付けてしまうのは、安易にして実正の伴わない理解である。宣長の執心を解く鍵は、今は囲りの木立ちに遮られて哀れな姿をとどめている、一本の山桜にこそ求めなければならない。

一

宣長は、享和元年九月廿九日に七十二歳で不帰の客となったが、没後、養嗣の太平が詠んだ追悼詠「やま室にまうてたるをりく」中に、次のような歌がある。¹

おくつきにうゝるさくらのわか木立早もこたりね見つゝしぬはむ

春毎にさかむさくらの花をこそ君か御面とみつゝしぬはめ

こととはぬ木にはあれとも咲いてむ花をは君か御言とおもはむ

右は、享和元年冬、宣長の墓前に事繁く詣でた太平が、来る春、墳墓に植えた桜の稚木が花を付けるのを思い描きつつ詠んだものであろう。いずれも桜花を通じて亡き宣長を思慕しようという歌であるが、わけても第二首は、桜花

によって宣長の面貌を偲ぶとまで言切っている。大平のことであるから、右の詠も、ある程度、宣長の遺志を汲んでの表現と考えてよからう。言換えれば、宣長は、自らの亡き跡を、桜花の色香をもって偲んでほしいと願ったということであるが、いかにも桜を愛好した彼らしい遺命と言うべきである。

さて、桜について多様な趣向を幾許も詠じた宣長ではあるが、花を通じて故人の倂を偲ぶとする趣向の作品は見出せない。ただ次のような歌に注意を魅かれた⁽²⁾。

閑庭落花

花は根にやとは有つるさひしきにかへるゆふへの庭の春風

落花のうたとも

根にかへる物としきけは山桜はりても見はや花のゆくへも

いずれも「花は散れば根に帰る」という趣意を基本に詠んだものであるが、とくに後者は、それを周知の伝説のように取りなし、その有様を確めるために山桜の根を掘り返してみたいという、いささか常軌を逸した執念を感じせしめる歌である。

また、同じ趣意を詠み込んだ歌として宣長が門弟を集めて主催した歌合の一つである、寛政七年三月の月次廿四番歌合中の第十一番の長谷川常雄の詠にも⁽³⁾。

をしみえぬこゝろをおのかかたみにて根にかへりゆく花の春かせ

なる一首が認められる。しかれば、花帰根という趣向は、宣長はじめ鈴屋一門ではかなり親しいものであったに違いない。もっとも、宣長が作歌に際して重用した類題集『題林愚抄』を繙いても、俊成の「尋ねくる人は都をわするれどねにかへりゆく山ざくらかな」⁽⁴⁾はか一首の作例が得られるし、その他、江戸期の類題集にも通例、一、二首の例歌

が挙げてあり、この趣向自体、決して珍しいものではない。なかでも右の俊成歌は、『風雅集』春下に入集したもので、多少、人々の口の端に上ったとも考えられる。

しかし、同じ趣向を詠んだ歌で、もっとも有力な例歌を挙げるとすれば、次の二首に尽きるのではなからうか。まずひとつは、西行の『山家集』下に収められる、

ねにかへる花をおくりて吉野山夏のさかひに入て出ぬる

の一首である。歌意は、散った桜が根に帰ってゆく夏も近い頃になって、漸く吉野山をあとにしたというもの。いまひとつは、『千載集』春下に入集した崇徳院の詠で、

花は根に鳥は古巢に帰るなり春のとまりを知る人ぞなき

の一首である。三月尽を詠んだこの歌は、『久安百首』中の作であるが、和歌において花帰根という趣意を詠み込んだ例は、ひとつの例外を除いて、もはやこれ以上、遡ることはできそうもない。

ところで、右の崇徳院詠は、「花は根に帰る」と「鳥は古巢に帰る」とが対句的に意識されているところに特色があるが、実はこれは、従来、指摘されているように、『和漢朗詠集』所収の詩の翻案にはかならなかった。いま当該の詞句を、寛文十一年刊行の北村季吟著『和漢朗詠集注』から左に掲げる。⁽⁵⁾

花^ハ悔^レ帰^レ根^ニ無^レ益^ニ悔^ム、鳥^ハ期^レ入^レ谷^ニ定^ム延^ビ期^ヲ。
清原滋藤

（略）花ハ春クレヌトテ已ニチリヌレドモ猶春アリト聞テ。悔レトモカヒナシト云ナリ。鶯ハ谷ニ入ラント思^サタテトモ閏月アリト聞テ其期ヲノブラント云ナリ

右は、「閏三月」の題のもとに収められた詩句で、詩意は、季吟が注するごとく、閏月のために春の暮が延びたことに對し、花はすでに散ったことを悔いたが、鶯は谷に入る時期を延ばすであらうというものである。ひるがえって、

崇徳院の「春のとまりを知る人ぞなき」の詠も、まさに閏三月を詠んだかと思われるような表現である。

さらにこの滋藤の詩の典拠として指摘されるのが、『老子』の「老子道経上」の「帰根第十六」である。すなわち、その一節に、

夫物芸芸、各復^レ帰其根^一、帰^レ根曰^レ静、是謂^レ復^レ命

⁽⁶⁾とあるのがそれで、「芸々」とは草の一名であり、万物は草の繁茂するように生じ栄えるが、やがて枯死してその根源に帰っていくという意味である。よって『老子』は、桜花に限らず、草木万般の自然な理を叙べようとしたものである。

一方、和歌においては、地上に降り積もる落花の様子に起因するのであろう、いずれも桜花に結び付いている。管見によれば、例外はわずかに一例を数えるにすぎないが、この例外は、花帰根を詠んだ歌では、もっとも早い時期に属するために蔑ろにできない。すなわち、『金葉集』巻十雑下の巻頭に置かれた、次の贈答詠がそれである。

公実卿かくれ侍りてのちかのいへにまかりけるに、むめのはなさかりにさけるを見て、えだにむすびはべりける

藤原基俊

むかし見しあるじがほにてむめがえのはなだにわれにものがたりせよ

返し

中納言実行

ねにかへるはなのすがたの恋しくはただこのもとをかたみとは見よ

右の基俊歌は、公実の死を悼んで彼邸に赴き、在りし日の公実の姿を偲びつつ、折しも咲き匂っていた梅花に向かって詠んだものである。ついで公実男実行の返歌は、亡き公実の代わりに梅花を恋しく思うなら、梅が散り帰っていた木本を忘れ形見として下さいというもので、散った梅花と死没した公実を重ね合わせるところが特色である。そ

ういえば『老子』の帰根の一節も、生と死との対比が発想の根幹にあるように思われ、あるいは実行歌は、『和漢朗詠集』を介さずに、直接『老子』から想を得たのであろうか。ちなみに公実が没した嘉承二年は『久安百首』の成立よりも約半世紀ほど遡る。

さて、和歌に次いで、桜花帰根の表現趣向が目立つのは謡曲の詞章である。『謡曲二百五十番集』で検索しても、『東北』『忠度』『三山』『簾』『竹雪』など、類似表現の認められる曲がすくなくないが、そのうちもっとも注意すべきは、やはり世阿弥の夢幻能の傑作とされる『忠度』で、その「キリ地」には次のようにある。⁽⁷⁾

御身此花の。蔭に立ち寄り給ひしを。かく物語り申さんとして日を暮らしとどめしなり。今は疑^{うたがひ}よもあらじ。花は根に帰るなる。我が跡とひてたび給へ。木蔭^{こかげ}を旅^{たび}の宿^{やど}とせば。花こそ主^{あるじ}なりけれ。

右は、尉の言葉に従って花の下で一宿した旅僧の夢に薩摩守忠度が現われ、定家への伝言を囑し、岡部六弥太忠澄と争い果てた様子を再現してみせたのち、跡を弔うよう願いつつ根に帰っていったというものである。文末部は、『平家物語』にもみえ、忠度の辞世として知られる「行ききくれて木の下かげを宿とせば花や今宵のあるじならまし」を借りた表現であることは言うまでもない。この歌は、謡曲の詞章による解釈に従うと、旅中、行き暮れて、この桜花の下に投宿すれば、死んで根に帰り桜と化した忠度がもてなしてくれるであろう、というほどの意味になろう。

さすれば、この花の下は、忠度の墓所でもなければならぬが、ちなみに現在、忠度の墓所と伝えられる兵庫県明石市天文町にある忠度塚は、五輪塔のほかに石碑二基が重なるように存し、囲りに石垣がめぐらされ、充分、墓所としての体裁を備えている。もちろん石碑の右手前の「ゆきくれて」の歌を刻んだ短冊状の石碑と、左手前の桜一本など、近代の所為も目立つが、早くから忠度の墓と考えられてきたことは疑いない。

桜花帰根の表現例は、謡曲の他に早歌また連歌俳諧にも見える。そのうち、江戸初期刊の俳諧作法書『毛吹草』に

は、まず「世話」のなかに、

はなはねにかへる

とりはふるすにかへる

とある。⁽⁸⁾これは、崇徳院詠にその根元を求むべきであるが、ともあれ、諺としても人口に膾炙していたことになる。

同書には、作例も、

花は根に帰る筋目か糸桜 界 定次

雪花も木の根にかへる雫哉 弘永

などがあり、すくなくとも貞門俳諧においては、句作の心得として記憶さるべき事柄に属していたのである。

ついでであるから、狂歌における用例もひとつだけみておこう。すなわち天明五年刊の『徳和歌後万載集』巻一春に、

花下忘帰 ふしまつのかゝ

よしや又うちは野となれ山桜ちらずはねにもかへらざらん

とある一首は、根を「寝」に言掛けたもので、歌意は、ままよ、家内は野のように荒れるのも仕方がない、どうせ山桜が散らなければ根（寝）に帰ることもあるまいから、というほどのものである。作者は朱楽菅江妻の節松嫁々で、この一首は多少、評判になったか、根岸鎮衛の『耳囊』巻三「狂歌流行の事」の一節にも次のようにみえる。⁽¹⁰⁾

阿気羅観江吉原に遊びて居統などして帰らざりければ、其妻詠るよし。

飛鳥川内は野となれ山桜ちらずば根にはかへらざらまし

吉原町に春は仲の町に桜を植て遊人を集むる事なれば、右桜を詠いれて根にかへらじの心、面白き故爰に記しぬ。

同書によれば、右の狂歌は、吉原の花見の折の居続けに材を得たものであることが具体的に知られる。いかにも狂歌風の取りなしと言わなければならないが、何はともあれ詩歌連俳狂歌と、これだけ広く用いられた表現趣向も珍らしいのではあるまいか。けだし、それだけ自然の摂理に協った表現であつたからであらう。

二

さて、宣長が、自らの死後、桜花を通じて自分を偲んでほしいと考えていたらしきことを述べたが、その想いは、彼の遺命を尊重して厳肅に執行された埋葬の在り方によく表われている。すなわち、死ぬ一年ほど前に認めた『遺言書』は、小津家菩提寺の樹敬寺に、夫婦の戒名を刻んだ世間通行の石塔を建てるほかに、

一、我等死骸之儀者、妙楽寺へ葬申度、葬式は樹敬寺勿論之事、右之段本人遺言致候旨、樹敬寺へ送葬以前、早速に相断可被申候

⁽¹⁾とあるとおり、遺骸を山室妙楽寺に埋葬するということが骨子をなしている。しかして、その遺骸を埋める墳墓について、次のように記している。

一、墓地七尺四方計、真中^少後へ寄せて、塚を築候而、其上へ桜之木を植可申候、扱、塚の前に石碑を建可申候、塚高三四尺計、惣体芝を伏せ、随分堅く致し、崩れ不^後申様。若崩^後候所あらば、折々見廻り直し可申候、植候桜は、山桜之随分花之宜木⁺を致⁺吟味、植可申候、勿論後々もし枯候はは、植替可申候

『遺言書』には、墳墓の図面も描かれており、文面どおり、石塔の後方に、山桜の木が一本植えられている。もっとも、宣長はこの後、『改正墳墓図』⁽²⁾を草しており、それによれば、桜のほか松も一株植えられている。おそらく松の植樹は、塚が崩れないようにとの配慮に出たことで、現状も桜と松各一株であることは、周知のとおりである。

さて、妙楽寺の墓地は、『遺言書』を認めた二ヶ月後の寛政十二年九月、宣長自身が山室山に赴いて、寺の門より四丁ほど奥に登った頂上付近の一面を見定めたものであることが、『山室山関係書類』によって知られる。そのとき宣長は、

山むろの山に墓をさためたるころよめる

今よりははかなき身とはなけかしよ千世のすみかをもとめえつれば
(13)の一首はかを詠じ、死後の安心を得た気持を表現している。

しかるに、『諸用帳』の「己未春（寛政十一年）」の三月の条に、

十一日
一、金三分

式匁三分四厘

おく墓地形直し石老ッ代

石屋手間日用ちん共

など⁽¹⁴⁾とあり、実際には、その前年には準備を進めていたことが確実である。また同じ条に、

八日
一、八匁
八重一重桜一本

三月廿一日
一、四匁
桜一本

右ハ代八匁之内渡し也、よく有つき候上、今四匁遣し候筈也

とあるが、そのうち後者は、「よく有つき候」などと、思い通りの桜を得た僥倖を述べていることから、奥墓の山桜ではないかと想像される。宣長にとって、山室山に墓の地所を得たこともさることながら、山桜の稚木を一本確保したことに、それ以上の安堵を感じたのではなからうか。

『石上稿』の「寛政十二年庚申」には、

妙楽寺の山の上に墓とをさためて、かねてしるしをたておくとて

山室に千年の春のやとして風にしられぬ花をこそ見め

なる一首がみえる。⁽¹⁵⁾「風にしられぬ花」は、風によって散ることのない花の意で、『千載集』の覚盛法師の「あかなくにちりぬる花のおもかげや風にしられぬさくらなるらん」のように、実体としての花ではなく、花の面影を詠んだものであろう。つまり、「春のやと」として山室山に墓処を定めたので、死後もずっと桜の面影を見ることができるといふものであるが、この趣意を支えるのは、やはり塚の上に植えられた山桜にはかならない。

さて、塚の上の桜と石塔という取合わせは、墓相としてとくに異様なものとは言えないし、もとより桜は宣長の好尚に基づいたまでである。しかし、同時にそれが、宣長の死生感に深く根ざしたものであることを見逃すわけにはいかない。宣長の死生感とは、端的に言うなら、『答問録』の「一二」に、

然るに神道におきて、此人死て後、いかなる物ぞと申安心なく候ては、人の承引し候はぬもことわりに候、神道の此安心は、人は死候へば、善人も悪人もおしなべて、皆よみの国へ行事に候、善人としてよき所へ生れ候事はなく候、これ古書の趣にて明らかに候也

⁽¹⁶⁾とあるごとくであるが、さすれば、すべての人が死後に往くと言う黄泉国がいかなる場所であるかが問題となろう。

詳しくは、『古事記伝』六之巻の「黄泉国」の条に説くところにつくべきであるが、その要点は「黄泉国は」唯死人の往て住国と意得べし」また「凡人といへども、ほど／＼に靈ありて、其は死ぬれば夜見国に去るといへども、なほ此にも留まりて、福をも、禍をもなすこと、神に同じ」と言うあたりに尽きていよう。これが、宣長が『古事記』等から読取った死後の世界であり、「住国」であるからこそ、歌に「千世のすみか」とも「春のやと」とも表現

したのであり、かつ人の靈魂は「なほ此世にも留ま」るものであるから、花の精として人々から思慕されることを望んだのである。

また『古事記伝』七之巻において、「根之堅洲国」を注して次のように言う⁽¹⁸⁾

○根之堅洲国 根とは、下つ底に有故に云、【草木の根もおなじ】、底津根之国とも、祝詞に根底之国ともあり、【根国とは出雲を云と云、或は須佐之男命の配所の名なりなど言説は、例の私の漢意なり、】

宣長の解釈は何の変哲もないもので、根国は下方にあるとする以上の解釈をひたすら拒んでいるようでもある。ただそのなかで、根の語義につき、「草木の根もおなじ」と割注を施していることに、こだわりを覚えざるを得ない。

もちろん、根の語釈として、自明のことを述べたにすぎないと言えは言いうる。しかし、根国とは死人が往く場所を指し、それが草木の根と同じであるということは、草木の根もまた、人が死んで往く場所とする解釈を成立せしめるものではないか。これを、宣長の奥墓にあてはめれば、山桜の木の本こそ、宣長の根国であつたと言つてよい。「花は根に帰る」という和歌の趣意と、「人は死して根に往く」という死生感とが異和感なく重なり合い、花と宣長とがひとつに融和する詩的世界がそこに浮上すると言うべきであらう。ゆえに大平は、桜花を通じて亡き宣長を偲ぼうとしたのであり、それはまた、先に見た『金葉集』の実行歌「ねにかへるはなのすがたの恋しくはただこのもとかたみとは見よ」や、「花は根に帰るなる。我が跡とひてたび給へ。」と言わしめた、謡曲『忠度』が織りなす世界にそのまま通ずるものがある。ただ、実行父の公実や忠度は宣長と異なり、おそらく死んで花と同体化することを、自ら演出したわけではない。

三

宣長の死に方を想うとき、まず念頭に浮かぶのは、やはり西行のことである。すなわち西行が、死の数年前に詠んだ、

願はくは花のしたにて春死なむそのきさらぎの望月のころ^(もと)

の素願さながら、文治六年二月十六日に七十三歳で往生を遂げたことはあまりに有名である。その死は、当時の歌人達にも感動を湧き起こしたごとくで、俊成の『長秋詠藻』の奥にも次のごとく書き記されている。

（略）其年^{去年}文治五年 河内ひろかはといふ山寺にてわづらふことありと聞きていそぎつかはしたりしかば、かぎりな

くよろこび、つかはして後すこしよろしとて、年のはて頃京にのぼりたりと申ししほどに、二月十六日になんかくれ侍りける、彼上人先年にさくらの歌おほくよみける中、（歌略）かくよみたりしををかく見給へしほどに、つひにきさらぎの十六日望の日をはりとげけることいとあはれにありがたくおぼえて物にかきつけ侍る

ねがひおきし花のしたにてをはりけりはちすの上もたがはざるらん

右によれば、西行が没したのは二月十六日のことであるが、「きさらぎの望月のころ」と庶幾したのが、釈迦が入滅した二月十五日と重なったため、黒川道祐著『日次紀事』（貞享二年序刊）の二月十五日の条などに、

西行法師忌^{東山双林寺有_レ塔、上賀茂西金寺蓮御堂并竹田西行寺亦修_レ之}

とあるように、坊間ではもっぱら仏滅と同じ日を西行忌とみなしていたのである。⁽¹⁹⁾

その釈迦の入滅の様子は、『涅槃経』などに記されており、釈迦が拘尸那国跋提河ほとりの沙羅樹の林の下で入滅

した際、臥していた牀の四方に八株あつた沙羅樹が枯れて、みな白色に変じたと言われる。このことは、葩遊燕編の『年中故事要言』(元禄十年刊)にも、

十五日ハ釈迦如来入滅ノ日ナリ、如来御歳七十九、二月十五日ニ於テ大衆ニ示シ已ツテ、頭北面西右脇ニシテ滅ス、沙羅樹トイフ樹八根アリ、此ノ木ミヅカラ合ウテニ株トナリ、如来ノ別ヲ慘ミテ、其ノ色変ジテ白シ、枝葉如来ニ乗覆フ

などあるとおりである。

ところで、沙羅樹のことが、『平家物語』の冒頭に「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、婆羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」とあることは有名である。これが『涅槃経』の偈である「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」に基づくことは言うまでもないが、『平家』が「婆羅双樹の花の色」が変じたごとく言うのは異色である。

西行の「願はくは花のしたにて」の歌の「花」が桜であることは、先掲の『長秋詠藻』などによっても確かめられるが、言ってみれば西行は、釈迦の涅槃物語の沙羅樹に対して、桜をもって置き換えたことになる。また、西行も『平家』同様、「婆羅双樹の花の色」を想い浮かべつつ、桜をそれに重ね合わせなかったとは言えないと思う。さて、西行の終焉の様子は、『西行物語』にも出ており、話の都合上、次に引いて置きたい。

(略)東山のほとり。双林寺のかたはらに。いはりをむすびて。くわんねんのまどのまへには。三明の月のひかりを友とし。称名のゆかのほとりに。せつしやの御むかひをまちて。あかしくらしけり。御堂のみぎりに。桜をうへられたりけるに。おなじく此花ざかり。釈迦入ねはんの日二月十五日のあさ往生を思ひてかくなん

ねがはくは花のもとにて春しなんそのきさらきのもち月の頃

すでに此歌のごとく建久九年二月十五日。正念たゞしくして。西方にむかひて

若人散乱心 にやくにさんらんしん 乃至以一花 乃至一花 供養於画像 供養於画像

漸見無数仏 せんけんむすぶつ 於此命終即 於此命終即 往安樂世界 わうあんらくせかい

阿弥陀仏大菩薩衆 あみだぶつだいぼさつしゆ 毘饒往所となへて いゝわじうしよ

ほとけにはさくらの花をたてまつれ我後の世を人とふらはゞ

とながめて。千返念仏やむ事なく。空に伎楽のをとほのかに。異香とをくくんし。紫雲はつかにたなびきて。

三尊来迎のよそほひ。しやうじゆくはんぎのぎしき。万民耳目をおとろかし往生のそくはいをとげにけり

もとより、『西行物語』には説話的な虚偽がすくなくないが、とくに西行の没時の二月十五日を、「此花ざかり。釈迦入ねはん日」とするのは荒唐無稽に近い。これは「願はくは」の歌が、「花のした」と「きさらぎの望月」とを一緒に詠み込んでいることに起因しようが、二月中旬のことゆえ花盛りということとはありえない。西行が希求したのは、花の季節に先立って埋葬され、やがて花に包まれる時を迎えるということであつたと思われる。そもそもこの歌は、桜に対する風狂と、仏陀に対する信仰と、どちらにより比重があるのであろうか。愚見では、主眼を桜に置いてみるべきとの考えであり、ここでの釈迦に対する西行の思慕は、単に信仰というより、沙羅樹の花の下での死に様にあつたと言ふべきである。この「願はくは」の歌は、『西行物語』の引用にもある「仏には」の歌や、

花にそむ心のいかで残りけむ捨はてゝきと思ふ我身に

の詠とともに、『山家集』の同じ歌群に配されている。まことに西行は、死際に臨んでも、桜に対する執心を断ちがたく感じたがゆえ、亡き跡に桜を供えて、霊を慰めてほしいと希つたのであろう。

さて、江戸時代に西行の死を改めて世に知らしめたのは、今西行と謳われた歌僧似雲の力によるところが大きい。

すなわち『円位上人古墳記』に、

西行上人の旧跡国々におほかれと、身まかり給ひし所さたかならず、いかにもして尋えまほしく年頃すくしつる、或人井河孝考のいひけるには、上人終留の地は河内国石川郡弘河寺と、ふるきふみにもみへ待れば、いにし頃行て尋つれと、所にもしれる人なし、いたつらに帰りさふらひき、若心さしありなは、すぎやうにことよせて、彼寺

のあたりこゝかしこ日をかさねつゝ心をつくし求めなは尋うへし

⁽²⁴⁾とあるように、年来、西行の墓を探しあぐねてきたところ、『五畿内誌』の著者として高名な並河誠所により、その墓所が終焉の地弘川寺周辺にあらうことを示唆されたのである。その後、似雲は、享保十七年二月三日より石山寺に参籠し、七日七夜にわたり昼夜不臥で丹誠を尽し祈願したところ、夢のお告があつたので、それに従つて弘川寺に赴いたと言う。しかして、「十五六計なる文教といへる子僧、此うへに行塚といふものあり、経塚をいひあやまりしとなんいふ、それこそ西行上人の古塚なれ、いひ誤れるにあらず、西行塚といふへきを上を略して行塚といひしものなりと、きこへもやらす袖をぬらしければ、人々も打しほれにけり」とあるごとくして、ようやく西行墓の発見に及んだのである。数百年を経た遺像堂の跡とおぼしい苔むした礎と古塚を前に、似雲はしばし感涙を抑えがたかつたと言う。

またのち、難波の樋口某の援助を得て、「円位上人の墓」と刻した石塔を建てたが、さらに翌享保十八年には、西行の「仏には」の遺詠を思つて、

一本の桜をたつさへ行て、塚のほとりに植はへるとて

一本も植て桜を手向はや我後の世といひしるしに

と詠じ、桜一本を手向けて供養した。こうして、似雲らの努力で西行墓は徐々に整備されたが、発見のきっかけを提

供した誠所の『河内志』（享保二十年刊）の石川郡の仏刹の条にも、

弘川寺 弘川村 後鳥羽上皇賜勅額 文治中西行
法師病而卒于此 傍有墓（略）

⁽²⁵⁾とあり、続けて『長秋詠藻』の該当の記事を引くところがある。似雲による墓の発見の報知を受けたものであろう。

ついで、同じく『円位上人古墳記』に収められた「花種記」によれば、西行五百五十年忌に当たる元文四年のこと、似雲は摂津富田の里に滞留して、今度は故郷の蔽島神社の霊夢を三晩続けてみ、京都へ上る途次、

弘河寺僧徒中より円位上人の墓の前に拜堂建立并石灯笼一对手水鉢其外寄附など有し中にも、長たる人を始末さ
まの人々も志をひとつにして、上人へ手向にとて塚のあたりなる山へ、桜千本植はへる

という内容を記した手紙を受取る。この桜千本も、もとより西行の「仏には」の詠に応じたもので、かくて西行の遺命は、似雲や弘河寺僧徒その他の篤志家の手で実現され、その壮挙は『円位上人古墳記』等によって世に喧伝されたのである。なお、似雲の墓が西行のそのすぐ近くに存し、墓標に植えられた山桜と小じんまりした墳土からなることも付記しておきたい。

四

西行とならんで、その死に様をめぐる、近世にもっとも取沙汰されたのは、ほかでもない兼好法師である。もとより、『徒然草』が爆発的な人気を博したことがその前提をなしているが、加えて『兼好法師集』に、

ちぎりおく花とならびのをかのへにあはれいくよの春をすぐさむ

とあることから、この一首がそのまま兼好の墓所の趣を表わしたものと受止められ、死後も桜とともにありたいとするその風狂が人々の景慕の的となったのである。たとえば、利微著『奈良比野岡』（別名「兼好法師伝」、享保十二年刊）などには、兼好の行状を記して次のようにある⁽²⁶⁾

これより後は、住居をもさだめず。信州更科の月に詠じ。東奥の松島にさすらひいたるところ逸歌あり。つゝあに十五寒暑をへて。都にかへりしに。故友親族おほくはなき名のみなり。ゆへに。康永二年七月廿七日。洛西并岡のふもとに。一塔婆を建立す。長四尺五寸阿弥陀仏の宝号を彫りつけ。傍に。桜樹数十株を植たり。兼好塔婆の脇にかきつくる

さながら西行を思わせる漂泊風詠ののち洛西双ヶ岡に塔婆を建立したとあり、つづけて「植おきて花とならひの岡の辺にあはれいく世のはるをへぬらむ」を散し書して、該歌を塔婆に刻したことを、まことしやかに叙している。

しかし、延宝以降、兼好伝の穿鑿が進んだことにもよろうが、終焉の地が山城双ヶ岡ではなく、伊賀国見山であるとする見方が有力となり、同書下冊の「兼好法師伝追加」の末には、

兼好か石碑は伊賀国。くに見山のふもと。種生村^{（近）}井庄^{（伊賀）}にありしを。延宝のころにや。いにしへをこのむ士ありて。草葬の中をわけ。石碑の苔辭を摩かして。たつね得たりしかば。是を図してひたりにをくものなり。

観心元年 俗名左兵衛佐

兼好法師墓

二月十五日 卜部兼好朝臣

として、陰刻の碑銘の図影まで掲げるが、その疑わしいことは言うまでもない。わけても奇妙なのは、桜に執しつゝ逝った西行の死に様と重ね合わせてみたためであろう。その没時を二月十五日として、西行と同じく仏滅の日をあて

ることである。『日次紀事』には、やはり二月十五日の条に、西行忌に続けて、

吉田兼好法師忌

始称「左兵衛佐卜部兼好、観応元年今日卒、并置有墓、然、実於伊賀国見山麓田井庄」
卒伊賀権守成忠告「京師」主上上皇惜之賜「米銭」令葬「同国分寺」贈「種大僧都」

とある。⁽²⁷⁾ ちなみに、兼好の同様の俗信は、素兄堂止静の『歌道岸の姫松』（宝永二年正月刊）の第四「つれく草之事」などにも見える。⁽²⁸⁾ 宣長の『宝暦二年以後購求謄写書籍』の付録の「書目」には、「兼好行状」藤田厚敬「同双丘利微」などと共に「歌道岸の姫松」止静の名も見えるが、実際に眼の触れるところであったか否かはさだかでない。ただ當時、文壇を騒がした話題であったことだけは間違いないのである。

さて次に、やはり遺命により特異な墓を遺した例として、三熊花頼の遺著『続近世畸人伝』から元政上人を挙げておきたい。すなわち元政は、寛文八年二月十八日、四十六歳で称心庵に没したが、彼には墓というべきものがふたつ存する。まずひとつは、『続近世畸人伝』に「遺骸を称心庵の側にはふむり。竹両三竿を植ふるのみにして塔をたてず。遺命によるとぞ」⁽²⁹⁾とあるごとく、京都伏見の瑞光寺傍の称心庵の側に、竹を三本植え盛り土しただけの墓が現存する。

そもそも元政は、詩歌を事とする風狂の士であるとともに、熱心な法華僧であったことでも知られる。彼の詩文集『草山集』の巻首に収められた「行状」に、「母年至七十九政相誘詣于身延山」⁽³⁰⁾とあるごとく、三十七歳の万治二年八月、その前年に没した父の遺骨を納めるため、甲斐身延山に参詣し、祖師日蓮の霊跡を慕ってさらに奥之院思親閣に登り、父の遺骨と自らの剃り髪を埋めるが、その折りの紀行『身延道の記』には、次のようにある⁽³¹⁾

うしろに大きな木あり、そのもとをはりて、父の遺骨をおさめ、おのがそりかみをもうづみぬ、あへてそこなひやぶらずといへるもおもひ出て、つゝみ紙に書きつけたるうた、

いたづらに身をばやぶらで法のため我くろかみをすてし嬉しさ

高祖上人の、九年のあひだ、日ごとに此峯にのぼりて、房州のかたをのぞみ、父母の御墓を、こひしのび給ひし事、あはれにかたじけなし

歌は、『孝経』の「開宗明義章」に「身体髮膚、受之父母」、不_二散毀傷_一、孝之始也₍₃₂₎とあるのを承け、仏の教法のために剃り落とした髪を埋めるのは本懐であることを詠じたものである。その遺跡として、祖師堂右手前に高さ一米弱の六角柱の石塔が現存し、正面に「元政□髮冢」の刻字が認められ、三字目はやや難読であるが、「埋」と解説されている。また手前には京都瑞光寺献納の手水鉢が置かれるほか、石塔の周囲に三本の桜が植えられているが、うちすぐ後の古木はすでに枯死しており、他二本は稚木である。この桜について文献には所見がないものの、元政自身が桜を手植えて目印としたことから、元政桜と称したとの口碑が伝えられる。元政の桜好きも、『草山和歌集』所載歌₍₃₃₎を見れば明らかであるから、右の伝説も信すべきことのように思う。

次いで、長嘯子や元政の墓相に拘わりを見せた、三熊花顛自身にも触れざるをえない。彼は、『近世畸人伝』の插画を描き、かつ『続近世畸人伝』の本文を述作し、寛政六年八月廿六日に、その遺稿を伴蒿溪に託して世を去った。そのため、同書の巻首には、まず六如の「題桜花帖」を載せ、花顛が描く桜花の画が、「富麗中一段氣韻。争_二豪髮_一於環絶之間_三者。舍_二三熊生_一而将_二安求_一焉。」というほどに優れることを称し、桜花の插图一面を掲げる。さらに蒿溪の「三熊花顛伝」を収め、

つひにまた思惟すらく。桜は皇国の尤物_(あまもの)にして異国にはなし。是を多_(おほ)くは国民の操_(みづか)ならん。はた枕の草紙に。絵に事おとりするものにさくらをのせたるは。むかしよりよく多_(おほ)く人なかりけるにこそ。いでこれをつとむべしと。研究_(けんきう)して生花を摸_(も)したるが。しる人は従来いまだかゝるものをみずといへり。

と⁽³⁴⁾やはり桜の描法に精進し、精細巧妙の域に達したことを言う。花顛もはじめは長崎に赴き、当地の画人月湖⁽³⁵⁾について漢画を学んだのであるが、のち我国特有の桜画によって、絵画史上にその名をとどめたことになる。

この「三熊花顛伝」は、わずかに一丁半ほどの略伝であるが、ほぼ半分ほどを費して、その死の奇なることを叙すので、煩をいとわず次に引用することとした。

生涯すべて奇に終る。其奇のとちめは。遺言していはく。たのむぞよ析骨^{せきこつ}にして桜の木。此こゝろは其體^{かち}を茶毘^{だび}し。骨を川に流し。なき跡のしるしには。さくらの木を植よといへることゝぞ。此析骨^{せきこつ}といへるは。さためて仏家に説あることならんと。諸学匠にとへどもしる人なし。此人は聞認^{きんにん}たることありしなるべし。さて知己の人遺言のごとく東山にて火葬せし骨を。たゞちに携^{たづ}へて嵯峨に行。戸南勢^{とみなせ}の前の流に沈めぬ。こゝはさくらのおとおもしろき所なれば。同じ河の中にもよかめりと戯れしにより。又日野の外山に。平生用たる禿筆及び其書画の反故をうつみて一樹の桜を栽^ま。一片の石碣^{ちやく}を建^た。六如僧都の銘を録す。こは醍醐山素川法師の領せる地であつた。その内弟山県蕪亭生ともにはかりて。逝者の志を遂^としめ。妹女露香のねがひをはたせるなり

右によれば、花顛は、謎めいた遺言をのこし、自らの遺骸を火葬したのち川に散骨し、別に墓所を設けてそこに桜を植えて標跡とするよう指示したと言うが、いわゆる両墓制の趣に近いものであろう。それを承けた知己は、東山で火葬に付した遺骨を、桜の名所である嵐山戸無瀬に流し、かつ日野の外山に遺愛の禿筆や反故を瘞めて桜樹を植え、さらに石碑を建てて六如の銘を刻んだという。花顛の遺命は、その号のとおり桜に執し続けた生き様を臨終に及んで集約したのと言え、遺憾ながら彼の遺跡はいまだ確認していない。

また、「三熊花顛伝」の後に、桜の花瓶を前に悦に入る様子を描いた友人周介の花顛像が置かれ、木村兼葭堂題の「万古一春 花芳不^レ滅 与^レ精爽伴 幽明奚別」の賛語が記される。花顛が幽界に去ったのち、花の精と化したこと

を称したものであろうか。

五

さて、花顛の画像と似たそれが、宣長にもあることを知る人はすくなくなろう。すなはち四十四歳の自画像がそれで、別に文机および書物等を配するところが異なるが、花瓶に活けた山桜に見入っている図は共通する。両画のうち、宣長のその方が早く成ったと考えられるが、この画像は流布の形跡もないので、花顛に影響を与えたという事はなからう。しかし、画像はさておき、墓相については、影響を受けた余地があるとすれば、それは宣長の方である。なぜなら、宣長と蒿蹊は、寛政五年三月から四月にかけて京都で交接し、おたがい『近世畸人伝』に所出の松坂の山村通庵を通じての縁戚に当たることを知って親密の度を加えたこともあり⁽³⁶⁾、花顛の桜にまつわる奇行も聞及んでいたに違いなく、翌年の花顛の死に様もまた宣長の耳に及んでいたと思われるからである。

さて、宣長の四十四歳の画像には、自讃として、

めづらしきこまもろこしの花よりもあかぬいろ香は桜なりけり

こは宣長四十四のとしの春みつから此かたを物すとて、かゝみに見えぬ心の影をもうつせるうたそ⁽³⁷⁾

とある。この自讃歌は、宣長が四十三歳の安永元年の春、吉野へ花見の旅をし、山桜を堪能してから一年後に詠まれた「安永二年花五十首のうち」の一首である。左注に「かゝみに見えぬ」云々と言うのは、画像を補うべく、外見からは知られない心中を表現した歌ということであろう。像と桜とがふたつ揃って、宣長が桜を称賛する心が表現されている。

しかし、何故か、この画像は宣長の意に充たないものがあつたようで、伝写されたことを聞かない。そして、その

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.



『続近世畸人伝』所載
三熊花顛像

宣長四十四歳の自画自讃像
（本居宣長記念館蔵）

十八年後の寛政二年、六十一歳でかの「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」⁽³⁸⁾の歌を付した自画像を描くに至ったのである。「大和心」が詠み込まれたことについては、別に論ずるところがあるが、それを描いてみると、この歌は、自分の大和心を人が問うたなら、それは「朝日に匂ふ山桜花」であると答えようというような意味となる。画像として、四十四歳のそれと大きく異なるのは、桜の絵の有無であり、先のは花瓶を眺め入る図の説明として、「めづらしき」の歌を素直に読むことができた。一方、六十一歳の方に桜の画がないのは、宣長自身が桜そのものに成切っていたと解釈すべきなのではなからうか。歌の解釈としてひどく奇妙に感ずるかも知れないが、つきつめて言えば、私は見てのとおり人間の姿をしているが、実は桜の化身であると言っているようなものであろう。

ここで、『遺言書』にいう霊牌なるものについて想起せずにはおれない。すなわち同書に「是は、平日常之傍に置、日々手馴候桜之木之笏有^レ之候、右之笏を即此霊牌に用可^レ申候」⁽³⁹⁾と述べ、手馴れの桜木で作った笏をそのまま霊牌に用うべきことを指示する。霊牌とは、いわゆる位牌であり、故人の霊代として仰ぐべきものであるが、それに宣長は、「秋津彦美豆桜根大人」⁽⁴⁰⁾と記し、桜の稚木の根を意味する諡を生前、用意していたのである。これなど、宣長は、死した後、桜の精と化すことを希ったとしか言いようのない所為である。

『遺言書』に宣長は、毎年祥月には座敷の床に画像を掛け、その前に霊牌を立てて膳を供えること、また、その後に歌会を催すよう勧めている。歌会のつど、遺族や門弟等は、画像と霊牌を拝し、山室山の奥墓に思いを馳せ、山桜に変化したかも知れぬ宣長を偲んだことであらう。宣長にしてみれば、和歌の世界に深く根ざしたまでで、かつ西行の死に様などに先蹤のみられることでもあり、さほど特異なことを想出したつもりはなからう。また『家の昔物語』等に述べているごとく、もともと吉野水分神社の申し子としてこの世に生を享けたとの自覚があったから、死して山桜の根に帰るのは、先祖返りの気持ちであつたかも知れない。宮崎以徳という人が著した『山室山鄙考』⁽⁴⁰⁾（明治三十

年記）には、

本居の神君のこの山室の里、妙楽寺の山上に埋葬地をトせられしは、そも当山は大和国吉野山と其脈相続きたるを以て、神君世におはせし時より寺僧に請ひて定めおかれし也、神君其終りに臨みて遺言せられしにも、吉野の方を遙拝せし様に埋葬せよといはれしと聞き伝へたり、其故は神君の父三四右衛門定利主年経て子なきを憂ひて、大和国吉野にしづまりゐます水分神社に請ひて、其驗ありて享保十五年庚戌五月七日生れいでられしといふとある。この言説を裏付ける資料は乏しいが、さりとて虚説としてむげに斥ける根拠もまたない。

〔注〕

- (1) 『歎の下露』写一冊。天理図書館蔵。『本居宣長全集』（筑摩書房）別巻三に『追悼歌文集』として所収予定。
- (2) 『鈴屋集』巻一。『本居宣長全集』第十五卷（昭和四十四年六月刊）一七頁。
- (3) 『鈴屋翁評月次歌合』写一冊。架蔵。三井高臣旧蔵。『本居宣長全集』別巻三所収予定。
- (4) 引用は『新編国歌大観』。以下、和歌の引用は、とくに断らない限り、同書による。
- (5) 『北村季吟古註集成』23所収（新典社、昭和五十三年十二月刊）四九頁。
- (6) 『新釈漢文大系7『老子・莊子上』（明治書院、昭和四十一年十月刊）三七頁。
- (7) 『謡曲二百五十番集』（野々村戒三編、赤尾照文堂、昭和五十三年七月刊）一〇九頁。
- (8) 岩波文庫版『毛吹草』（竹内若校訂、昭和十八年二月刊）九九頁。また作例は、二二八頁、三二八頁。
- (9) 日本古典文学大系『川柳狂歌集』（岩波書店、昭和三十三年十二月刊）三一九頁。
- (10) 岩波文庫版『耳囊』上（長谷川強校注、平成三年一月刊）三二七頁。
- (11) 『本居宣長全集』第二十卷（昭和五十年八月刊）二三〇頁。
- (12) 本居宣長記念館蔵写一枚、『本居宣長全集』別巻三所収予定。
- (13) 『本居宣長全集』第二十卷二二七頁。

- (14) 同右第十九卷（昭和四十八年十一月刊）六七頁。
- (15) 同右第十五卷（昭和四十四年六月刊）五〇二頁。
- (16) 同右第一卷（昭和四十三年五月刊）五二六頁。
- (17) 同右第九卷（昭和四十三年七月刊）二三八頁。第十一卷（昭和四十四年三月刊）三八八頁。
- (18) 同右第九卷三〇三頁。
- (19) 『日次紀事 本文と索引』（大阪女子大学近世文学研究会編、前田書店、昭和五十七年二月刊）一〇七頁。
- (20) 享保三年五月、大坂柏原屋清右衛門板、刊七冊。高橋伸幸氏うもれ本文庫本、当館蔵マイクロフィルムによる。
- (21) 日本古典文学大系『平家物語』上（岩波書店、昭和三十四年二月刊）八三頁。
- (22) 『大正新脩大藏經』第一卷阿含部一（大正新脩大藏經刊行会、昭和三十七年一月再刊）所収『大般涅槃經』二〇四頁。
- (23) 刊三冊、宝永二年三月、武江日本橋出雲寺四郎兵衛、洛陽押小路浅見氏吉兵衛版、河野信一記念文化館蔵、当館蔵紙焼写真本による。
- (24) 刊一冊、弘河寺蔵板。京都女子大学図書館吉沢文庫本、当館蔵紙焼写真本による。なお、弘川寺には、元文四年十二月二十六日の火災後、似雲自身が焼亡箇所を補筆した写一卷が現存する。また同寺には、似雲六十七歳のときの自画像で、上部に「仏にはさくらの花を奉れわか後の世も人とふらは」の歌を記す一軸が存する。
- (25) 『河内志』河内国之三、享保二十年初春、京師書舗茨城多左衛門鐫。内閣文庫蔵。
- (26) 享保十二年三月、京綾小路富小路角山本喜兵衛他二書肆刊。内閣文庫蔵、刊二冊。
- (27) 注（19）参照。
- (28) 『本居宣長全集』第二十卷四〇八頁。
- (29) 東洋文庫版『近世崎人伝、続近世崎人伝』（宗政五十緒校注、平凡社、昭和四十七年一月刊）二七〇頁。ちなみに元政の訃報を聞いた水戸光圀は、その老母に対する孝養を称して、「嗚呼忠臣楠子」に倣って「嗚呼孝子元政」の文字を送って建石を奨めたが、法弟の慧明は、師の遺命を思つて固辞した。その墓は文人等に慕われ、『蕪村句集』下に「寒月や枯木の中の竹三竿」の句がある。
- (30) 『艸山集』（平楽寺書店、昭和五年十一月刊）七頁。
- (31) 『深草元政集』一（島原泰雄編、古典文庫、昭和五十二年十一月刊）所収、一〇八頁。

- (32) 新釈漢文大系35『孝経』（明治書院、昭和六十一年六月刊）。
- (33) 『深草元政集』一所収、「花のうたの中に」と題する歌群など。
- (34) 東洋文庫『近世崎人伝・続近世崎人伝』二五五頁。
- (35) 古賀十二郎『長崎画史彙伝』（大正堂書店、昭和五十八年十一月）二〇二頁に「月湖は、熊斐を師として画法を学び、花卉翎毛を能くす。」とある。
- (36) 『本居宣長全集』第十六卷（昭和四十九年十二月刊）所収『寛政五年上京日記』五一七、八頁。
- (37) 本居宣長記念館蔵、写一軸。
- (38) 自画自賛像は本居宣長記念館蔵、写一軸。専門の画工に書写せしめ、自賛を自記したものなどは、多数存する。
- (39) 『本居宣長全集』第二十卷二三三頁。
- (40) 大洲市立図書館蔵写一冊による。奥書は、「明治三十年四月飯南郡花岡村大字山室の里にて宮崎以德記しつ」。